
私のポケモン生活

ほなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のポケモン生活

【Nコード】

N6983F

【作者名】

ほなみ

【あらすじ】

スーワン地方のコイズタウンに住むリンは子供のころから、ポケモンのトレーナーもしくは、コーディネーターになりたかった。そしていま、そのリンは旅に出る・・・

はじめてのポケモンゲット

ココは、スーワン地方。スーワン地方のコイズタウンに住むリンは今から旅に出ようとしていた……

すてきな太陽の光。私、リンはベットからおりて朝食をとり、うれしさいっぱいでリュックをしょって家をでた。

今日から私はポケモンのトレーナー、もしくはコーディネーターになるのだ。

「気をつけてね。リン。テークシティにいたら連絡してね。」
「おどおどしながら、ママが言った。」

「だいじょうぶ。心配しないで。いつてくるね。」

そして、このコイズタウンをはなれた。
ここから、テークシティへの道は、なんにもないから野生のポケモンが出てくる心配もない。

数分歩いて都会のテークシティについた。コイズタウンは、そりゃあ見事な田舎だ。でもテークシティは、コイズタウンと比べ物にならないくらい都会だ。

「そうだ。連絡と……」

私はポケモンセンターに入った。中ではポケモンの回復を待とうとイスにすわってたり、ポケモンと、遊んでいる人たちが、大勢だ。さすが大都会。田舎とは、ぜんぜん違う。

私はテレビの前に行き、電源をいれた。コイズタウンのママあてにするとママが出てきた。

『リン！だいじょうぶ?!』

「ぜんぜんオツケー！テークシティに無事に、つきました。」

『よかったわ。次はどこ行くの?』

「わかんない。旅しだい、かな?」

『そう、がんばるのよ。』

そして電源をきった。

私は、まず、フレンドリイショップへ行き、モンスターボールを5個買って、フレンドリイショップを出た。そして、503番道路へむかった。

「いけっ！ピンプク！」

503番道路にいたのは長い髪の少女だ。あの可愛らしいピンプクを連れている。

「なに？」

コチラにきずいたようだ。

「可愛いね。そのピンプク」

「ありがとう。あたし、カナ。君は？」

「私はリン。」

「ねえ、いつかい闘ってみない？」

「私、まだポケモンもってないの。」

「ということは、新人さんね？あたしが、いろいろ教えてあげるよ」とするとこっちに来て、というように合図をした。すると、カナが、コリンクをだした。

「こいつは、ココ。じつを言うとあたし、まだ10匹くらいしか、捕まえてないんだ。」

ココは、背伸びをしてコチラをむいた。・・・か、可愛い・・・！！
サッ

とつぜん草むらから野生のコロボーシが現れた。

「見ててね。これがポケモンの捕まえかた！！ココ！【たいあたり】！」

ココが助走して思いつきり、コロボーシにぶつかる。コロボーシはグルツと後ろへとばされた。あの一撃で十分ダメージを受けたはずだ。するといきなりコロボーシが固まる。【かたくなる】をつかったのだ。

「いまだ！モンスターボール！」

カナが、ボールを弱っているコロボーシに投げつける。

コロボーシは赤い光に包まれやがてボールの中へ姿を消した。

「ざっとこんなもんね。弱くなったらモンスターボール。《ひんし》になっただらダメなの。だから相手を《まひ》や《ねむり》にした
りすると捕まえやすいよ。」

「ありがとう」

「でさ、リンは次、どこ行くの？」

「まだ決めてないの。」

「じゃあ、あたしといっしょにシエクラタウンにいこうよ。ここから東にある水の都なんだけど・・・」

私はもちろん賛成した。そして、シエクラタウンにいくまで何匹かポケモンを捕まえる計画をしている。

迷わず今から行くことになった。

510番道路は水たまりがあつたり、天気がいろいろ変わる。私達は、いつ、ポケモンが出てくるか待ちながら、シエクラタウンへむかった。草のしげみの中を進んでいく。

・・・パチーっ・・・チチツ・・・

どこかでポケモンの鳴き声があった。そつと草のしげみをぬける。

そこには、傷だらけのパチリスがいた。すると、カナが私の肩を叩いてくる。

「ねえリン。このパチリス、今のうちにつかまえたら？」

「何言うの！？そんな卑怯なこと、私、したくない」

すると、カナはがっかりした表情をした。

ゴメン・・・でも私、そんな卑怯なこと・・・したくないの・・・

「カナ、ここらへんにポケモンセンター、ない？」

「近くに、小さなポケモンセンターならあるよ。」

そして、私はパチリスを抱きかかえて、カナといっしょに走った。

途中で、雨がふった。でも迷わず走った。

「あっ！！」

水たまりでころんでしまった。

「だいじょうぶ!?」

「う、うん・・・」

「チチ?」

パチリスも、心配してくれた。ありがとう、パチリス。

「ポケモンセンターは、目の前!!がんばれ!リン!」

そして、私は目の前のポケモンセンターへ、走った。

「だいじょうぶです。あのパチリスは助かります。きっと、昨夜の雨で地面がぬかるみ、すべって坂からおちてしまったのでしょう。

あの野生のパチリス、坂のしたにいませんか?」

ジョーイさんが言った。

たしかに、あのパチリスは、坂の下にいた。

さすがジョーイさん、まるまる、当たってる。

「ラキツ!」

看護師のラッキーがパチリスを抱いてる。パチリスはスヤスヤねむってる。

「傷はなおりましたので、しばらく、そっとしておいて下さい。」

「はい。分かりました。」

そして、私はパチリスをあずかった。そっと近くのソファアに座った。

外はいつのまにかはれてる。

「おーい。リン。」

カナが、メロンパンを2個もってきた。

「自動販売機に売ってたんだ。はい。」

そう言っつて、1個くれた。

食べ終えたとき、パチリスが、目を覚ました。

「チチツ!」

いきなり目を覚まし、ポケモンセンターの中を駆け回っている。

「もう元気になってる!」

「そうだね。」

「逃がしてあげるの？」

「……そうだね……」

本当はパチリスを手放すなんていやだったけど、しょうがなかった。

「おいで、パチリス。」

「パチッ！」

すぐパチリスが、駆け寄ってくる。

そして、私はパチリスを抱きかかえて、ポケモンセンターを、出た。

「さあ、パチリス、いきな。」

「パチ？」

「どうしたの？さあ、帰りなよ。」

「パチパチ！チーっ」

パチリスは、私から離れようとしなない。

「もしかして、リンと離れたくないのかもよ。」

カナが言った。そうだったらいいけど……

「パチリス、私と離れたくないの？」

パチリスがコクリと、うなづく。

「じゃあ、私のポケモンに、なる？」

「パチッ！」

元気に返事をする。

「よかつたね、リン。自分のポケモンを手に入れたんだ。」

「あ、そうだっ」

私はリュックからモンスターボールをとりだし、パチリスに投げた。

パチリスは赤い光に包まれ、ボールの中に姿を消した。

「パチリス、ゲットー！」

「おめでとーっ」

念願のポケモンゲット。もう最高！

また、パチリスをボールから出す。

「よろしくね！パッチ！」

「あ、ニッケネームつけたんだ。」

パッチはこのニックネーム喜んでる。

「よし！目指すはシエクラタウン！」

そして、私は新しいポケモンと共に、シエクラタウンへと、かけだした。

私のポケモン生活は、始まったばかりだ

宿の悩み

やっとシエクラタウンについた。私、リンは一息ついた。

「だいじょうぶ？」

カナが聞いてきた。

「だいじょうぶ。心配しないで。」

空を見上げた。もう夜だ。パッチはボールの中で、休んでいるはず。

「あ、そうだ。カナ。私、ポケモンセンターに行つてママに連絡してくる。」

そして、私はポケモンセンターをさがした。

赤い屋根の目立つ建物が見えた。あれがポケモンセンターだ。私はポケモンセンターに入った。

そして、テレビの前に行つて電源をいれてママに連絡する。

『リン、今、どこにいるの？』

「あのね、今シエクラタウンにいるの。テークシティで会つたカナといっしょにきたの。」

『そうなの。ポケモンはもう捕まえた？』

「うん！パチリスのパッチなの。」

『よかったわね。もう今日は遅いから早くねるのよ。あと、カナさんにもよろしくって伝えといて』、

そして、電源をきつた。ポケモンセンターを出てさっきの場所へ行く。

が、さっきの場所に行つてもカナはいなかった。

「あれ？カナー！」

「おーい。リン！」

そして私はカナの元へ走つた。

「宿をとつただけで行こ。」

そして私はカナといっしょに宿へ、向かつた。

「私はこの宿の主人のテナです。」

「きやはは！となりで子供二人がさわいでる。」

「その子供は私の子です。女の子がユメで男の子がユウです。こんなちいさな宿ですが、ごゆっくりしてくださいね。」

テナさんがニコニコしながら部屋をでた。たしかに部屋もせまい。

「ふう、ジューズでも買って来る。」

そして、部屋をでて自動販売機に来た。

「あ。」

そこにはユメちゃんがいた。

「ユメちゃんまだいたの？夜遅くに・・・」

「ママ、てつやでおきてるの。」

「大変だね。ここって、評判、高い？分かる？」

「いっつも、『赤字続き・・・もう・・・だめなのかなあ・・・』ってママが言ってる。」

あ、赤字ってことは、だめなんだ・・・

「そ、そういえば、お父さんは？パパは？」

「いないよ。ずいぶん前に死んじゃった。」

気安く言うね・・・子供って・・・

「むかしは、おきやくさんが、いっぱい、いてね、みんなさわいでた。パパがまだいる時」

「どうして、赤字に？」

「あのね、近くに、『ピチューなホテル』があるのっ！いっぱいピチューがいてね！・・・」

でも、そのピチューうれしそうじゃ、なかった。」

（きっと、そのホテルのせいで、お客がこないのね・・・）

「あ、ユメちゃんジューズいる？」

「おれんじ！」

そしてジューズを買った後、私は部屋に戻った。

「おそかったね、リン」

「それが・・・ユメちゃんから聞いたんだけど・・・」
私は『ピチューなホテル』のことや、この主人^{ババ}のことをすべて話した。

「大変ね・・・この宿、見るからに、ガラガラなもの・・・はい、ねましょ！」

「じゃ、おやすみー」

「おやすみ」

そしてぐっすりと、私たちは眠りについた。

翌日・・・

「おはようございます。朝食はできてますので・・・」
そう言くと、テナさんがどこかへ行った。

食堂へむかうと客はゼロ。ぽつりと、トースト、ハムエッグ、コーヒーが、置いてあった。

食べ終わったとき、テナさんがきた。

「おさげしますね。」

そして、お皿を持っていった。

「さてと、チエックアウトは、10時まで、どうする？」

「ねえ、久々に、ポケモンバトルしようよ！」

「いいねえ」

そして私たちは裏庭に向かった。

「使うポケモンは、一体。戦闘不能になったら負けね。」

「了解」

私の使うポケモンは、もちろんパッチ。そもそもパッチしかいないし。

「先行は、ゆずるよ。」

カナが、言った。

「バトルスタート！」

初めてのポケモンバトル！勝ちたい！

「いけ！パッチ！」

「たのんだよ！ビビ！」

ビビ、とはビツパだ。前歯を出している茶色の生き物。ビーバーみたい。

「手加減なし、ね」

「じゃ、いくよ！パッチ【じゅうでん】！！」

パッチが黄色い光につつまれる。やがて、光が消えてパッチの周りに電気が見える。

「パッチ！【でんじは】！」

「ぱちぱーっち！」

パッチがビビに飛び込む。

「ビビ、よけて！」

すんなりビビはよけた。しまった！が、運よくビビの体にかすれた。ビビはかすれた後、体の動きがにぶい。

おそらく《まひ》になったのだ。

しめた！

「パッチ【たいあたり】よ！連続で！」

助走をつけて【たいあたり】しまくる。

だんだんビビが弱っていく。

「とどめの【スパーク】！」

パッチが走って行く。

が、

「ぱちっ！」

「パ、パッチ！」

コケた。正確に言えば、ころんだ。

「あはは！こけたー！」

「ころんだよー！きゃはは！おもしろーい！」

この声、ユメちゃんとユウくんだ。

いつの間にか見ていたらしく。

「スキあり！ビビー！【いかりのまえば】！」
「ビツパーー！！！」

近づいてくる。立って！パッチ！

「ピチューー！！！」

突然、草のしげみから、ピチューが飛び出してきて、ビビの前に現れた。

「び、ビビーすとーっぶー！」

「び、びびーっ！！！」

ビビ、急ブレーキ！

「ビツパーー！！！」

「ぴちゅー？」

ぎりぎりセーフ。無事、止まることのできたビビ。

「お、おいっ！まてえー！！！」

「ぴちゅー！！！」

ピチューに続き、おじさんがきた。おじさんがスライドする。が、ピチューはジャンプして逃れた。

「このっ！！！」

すばやくピチューを、おじさんが捕まえた。

「逃げるなよ！ったく。うちの商品だからなっ！！！」

「ぴ、ぴちゅー！！！」

ずいぶんと、怖がつてる声。するとおじさんがコチラに頭を下げると、きた道を戻って行った。

「『ピチューなホテル』のピチューだったね。」

「こんなところまで、ピチュー、逃げてくるなんて、すごいー！！」
ユメちゃん、ユウくんが言った。

「へんなのーもうすぐで、倒せるところだったのに・・・」

「ねえカナ、いつかい『ピチューなホテル』行ってみよ」

「・・・いいけど・・・？」

私たちは『ピチューなホテル』の裏に来た。

「なんか、えいがの、調査みたあ〜い！」

それよりなんで、ユウくんもユメちゃんもいるのか・・・

「あ、リン見て！」

窓から見たのは、たくさんのおじさんだった。

「お前ら！今度逃げたら、容赦しないぞ！」

「ピ、ピチュ〜」

「このホテルのマスコットはピチューだ。そして客の気に入ったピチューを渡す。お前たちがいやがってもな！」

そうか・・・だから評判がいいんだ・・・

「おい、リン。こっちにきて」

カナが呼んだ。

玄関の方へ行くと、ちょうどお客さんが、ピチューを連れて出てきた。なんか上品な人。

「可愛いよね。このピチュー。」

「ピチュー」

なんだか、悲しい声。

「どうしたの？うれしくない？」

「ぴ、ぴちゅー」

「あはは！このピチュー、おもしろーい！」

「あら、この子ったらどこからきたのかしら？」

え、えええ！ユウくん、ユメちゃんが！

「す、すいません！」

「え？この子たち君の？」

「あ、いえ、あっちの宿の子です！」

「ぴちゅー！」

「おいでえー」

なんと、ユメちゃんがピチューを抱き上げた。ピチューはうれしそう。

「あの、このピチュー、あまりうれしそうじゃありませんね。」

「そうなのよ。どうしてかしら。」

「あのね、さつき裏で、おじさんが、『おまえたちはここのマスコミだ！客へ売る！お前が嫌がつてもな！』って言った。」

「ちよつと、ユメちゃん！」

「えっ？だ、だれに！？」

「ここのピチユー達に」

「ええ！」

「お客さん！」

玄関から、ホテルの人が出てきた。

「これ、お客さんのですよね？」

これ、とは花柄のハンカチだった。ハンカチをすんなり女の人は受け取った。

「ええ、ありがとう。」

するとホテルの人は、ユメちゃんをじつと見た。するといきなり、ユメちゃんの抱っこしているピチユーを取り上げた。

「このピチユーはこの人ですよ。盗んじゃだめです！」

「ああ・・・ピチユー！・・・ひくっ・・・ひくっ・・・ひくっ・・・」

どうぞ、とお客さんに渡したホテルの人はユメちゃんをじつと見た。すると、とうとう・・・

「ふあああん！！あああん！ええん！うああん！」

泣き出した。ホテルの人は知らんぷり。

「盗んだ方が悪いのです。さあ君たち帰りなさい！」

「覚えてな！」

カナがいうと私たちはひきあげた。

「くそっ！あいつら子供にまで・・・」

カナが言った。

「時々いたずらしてくるんです。」

テナさんが言う。

チリン チリン

「はぁーい」

カウンターからベルが鳴った。

そこにはあのあじさんがいた。

「どうも、『ピチユーナホテル』の者です。さきほどは客のピチユーナを盗んだと……」

「いいえ、誤解です。」

「あ、あのオヤジっ！」

「君たち、あの時の！……ふふふ……ではポケモンバトルはどうですか？ 負けた方が、宿をやめると……」

「受けて立つ！」

「まって……私がやる……」

みんな私を見た。そう、いったのは私。

「ほう……いいだろう……」

そして裏庭へ向かった。

「使うポケモンは一体のシングルバトル。」

「準備はいいですけど……やめといたほうがいいですよ……」

「やめるわけない！」

「バトルスタート！」

「がんばって！ パッチ！ おじさんに負けないで！」

「いけっ！ ライチユウ！」

おじさんはライチユウだ。でんきとでんきだ。勝ち目は50%

「先行はゆずります。」

「よし！ 【スパーク】！」

光に包まれたパッチはそのままライチユウにぶつかる。

「ライラーイ」

「だ、ダメージ0!?!」

「【かみなりパンチ】だ。」

ライチユウの右手にでんきができてこっちにとっしんしてくる！

「よけて！ パッチ！」

「パチー！」

命中した！ そんな！

「おじさんに・・・ライチュウに・・・」

「いっっておくが、ワシはオーナーだ。」

「リン！あたまを使いな！」

そっか、技じゃ向こうが圧倒的上。それじゃ、

「パッチ！だいじょうぶ？」

「パチー！」

「よしパッチ！空中回転！」

ジャンプしてくるくる回る。

「何する気だ。まあいい。ライチュウ！【かみなり】！」

ゴオン

「よけて！ライチュウに飛び込んで！」

回転しながらライチュウに行く。

「なにしたいんだ？ライチュウ、高くジャンプだ。」

しっぽを使ってジャンプする。

「待ってました！パッチ、しっぽをつかんでさらに空中回転！」

しっぽをつかんで回る！けっこう回る〜

「ぱちち！」

終わったときはもう目が回りすぎて立てないみたい。

「ライチュウ戦闘不能！パッチの勝ち！」

「やったー！」

「おみごと。」

一人の拍手。しかもこの声。

「昨日の、女の人！」

「オーナー話は聞いたわ。ポケモン達をいたため、それに子供にも危

害を加えるなんて・・・逮捕よ！」

「なんだ・・・お前さんいつたい・・・」

「私は宿・ホテルの管理人の、ミスズよ。それより、オーナー、警

察に行くわよ。」

「ぴちゅっ！」

「あら、この子ついてきたの？」

「ぴーちゅー！」

「わっ！」

突然ピチューが飛んできた。

「うふふ。いつしよに旅したいそうよ。」

「え・・・来る？」

「ぴちゅー！」

またまたポケモンゲット！・・・なぜか、でんきタイプのポケモンが多いけどラッキー

「やったー！！！」

「よかったね。」

夕暮れ、ミスズさん達とお別れをかわした後、このシェクラタウンを出ることになった。

テナさんの宿は、回復しているそうだ。

新しいポケモンと共に、次の街へ、旅をする。

ジム挑戦！

「カナー、つかれたあー」

「リン、すっかりしな！ほら、町がみえてきた。」

私たちは、シエクラタウンからはるばる遠くの、ラオンタウンにやってきました。

ここにはラオンジムがあるって聞いて、この町にやってきたのだ。

「ジム、行く？」

カナが言ってきた。

「早いよ！休んでからいくの！」

私たちは、ポケモンセンターで休むことにした。

「手持ちのポケモンは14か。どれにしよう……………」

「4、5、6……………私、手持ち5匹だ。カナより少ない……………」

「しょうがないよ。リンは、トレーナー始めたの、あたしよりおそいし……………」

「そうだね……………」

私のもってるポケモンは、パチリスのPATCHに、ピチューのピーちゃん。そして、チコリータの、チコ、そして、ルリリ。最後に、ミロルのミミコ。

これが私の手持ち。

ジムに挑戦するの、初めてなんだよねえ。

しかも、ほのおタイプの使い手だとか……………」

翌日……………」

「よおし！行こー！」

なんで、カナはこんなにお気楽なの？

まあ、私よりはトレーナー歴長いし、いろいろ詳しいけど、それに、ジムの挑戦、何回か、したことあると思うけど……………」

「カナは、ジム戦、やったことあるの？」

「えっ？あたしは、一回しかやったことないよ。でんきタイプ使いの人と闘って」

「勝ったの？」

「ううん。ざんねんながら、負け。でもさ、なんか、強い人と闘うの、楽しくってさまたやりたいの。」

「だから、けっこう気合入ってるんだ。」

「リンも、気合、入れなよ。」

「でも、勝つかなあ。だって、ほのおタイプでしょ？私、みずタイプとか、1匹しかもってないし。」

「だいじょうぶだよ。たぶん……………」

「……………でもさっ！きつとだいじょうぶ……………あ、ジムリーダーって、だれだっけ？」

「ナルダだって。通称、ほのおのキツネだよ。」

キツネ？キツネか。なんだろう？

「よし、入るよ。」

目の前には、ラオンジム。赤い屋根の建物。

中にはいると、1本の橋があった。下は溶岩。あついい

「たのもう！」

カナが叫んだ。

えっ！道場破りかつ！

「さあ。勇気のあるものは、橋をわたれえ！」

奥から声がした。

よしっ！気合い入れて！

熱い溶岩の上を渡り切ると、照明がパツとついた。

「あ、あなたが、ナルダさん？」

「いかにも！うちが、ナルダ！」

髪の毛が赤毛のみつあみ。かなりの気合いの持ち主みたい。

「使うポケモンは、2対。正々堂々と、戦うよ！まずは、どっちか

ら、戦う!?!」

「あつ!あたしが!」

カナが前に出た。

見本を見して、くれるのかな?

「ハール村出身の、カナ!そして、ラオンジムの、ジムリーダー、ナルダ様!

バトルスタート!」

審判が、旗をふった。

「いけ!ロコン!」

「コーン!」

モンスターボールから、赤いきつねの、ロコンがでてきた。だから、ほのおのキツネなんだ。

「がんばれ!ココ!」

カナは、いつものコリンクのココだ。

「先行は、カナさんで、いいですよ!」

「では、お言葉にあまえて!ココ!【でんげきは】!」

「コー!」

ココから、でんげきがとびだしてくる。

にげきれの!?!ロコン!

「ロコン、ジャンプでよけて!」

ロコンが、高くジャンプする。それで、ココの攻撃はよけられて…

……

「ロコン、そのまま【かえんほんしゃ】!」

「コーン!」

熱そうな火が、ココに向かって、ロコンの口から、でてくる。

ココはよけられずに、ダメージをくらう。

「ココー!」

カナが叫ぶ。すると、ココは立ち上がった。

がんばれ、ココー!

「ココ、【でんげきショック】！」
すると、ロコンが、まひしたように、倒れこむ。

「よし！ココ、【たいあたり】しながら、【スパーク】！」
助走をつけて、走る。そして、走りながら電気の光がココの体を包み込む。

すると、ナルダが、なぜか笑った。

……………なぜ？

「ロコン、【ほのおのうず】よ！」
ロコンが、ほおのをはく。

「ああ！ココ、だめ！とまって！」

しかし、ココは走りすぎて、とまれなかった。

そして、ほのおにかこまれて、にげきれず、うずのなかで、たおれた。

「コリンク、戦闘不能！」

「うぐぐ……………」

カナは、ココをモンスターボールの中に入れた。

「降参する？それとも、続ける？」

「もちろんですよ！キヤキヤ、がんばって！」

「キヤモ！」

キヤキヤ！？なにそれ！キヤモメの、キヤキヤ？

私、そんなの知らないよ！それに、カナがもってたなんて、聞いてない！

「ロコン、【あやしいひかり】！」

ロコンが、光をだして、キヤキヤに、出す。

「キヤキヤ、ふきとばして。」

キヤキヤが、風をおこす。そして、光は、ロコンのほうに、飛んでく。

「キヤキヤ、【みずてっぽう】」

口から、水をはきだす。

「ロコン、【かえんほうしゃ】」

みずと、ほのおが、ぶつかりあう。

そして、もくもくと、けもりがでてくる。

相手のロコンが、よくみえない……………

「【だいもんじ】！」

煙の中から、声が出た。

すると、ロコンのほのおが、けむりをけして、キヤキヤに飛んでく。

ポウッ！！

「大」の字が現れて、キヤキヤは、戦えなくなってしまった。

「キヤモメ、戦闘不能。よって、勝者、ジムリーダー、ナルダ様！」

「カナ！」

私は、叫んだ。

カナは笑っていた。

そして、つぶやいた。

「負けちゃったね……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6983f/>

私のポケモン生活

2010年10月9日23時18分発行